



は く さ い

11月も終りになると、どの青物市場にも、はくさいが見事に並ぶ。本県は日本一の結球はくさいの産地だ。昔、小学校の国語の教科書に、初冬をうたつた詩があつた。その中にサクサクとはくさいをかむ、という一節があつたのを憶えているが、霜柱をサクサクと踏みしだく季節に、朝げの食卓、白い御飯に、はくさいの取り合わせは、詩人でなくとも、その清爽感をうたいたいくなるものである。

はくさいは、東洋における重要な野菜の一つ。アブラナ科で、結球はくさい、半結球はくさいと不結球はくさいの三群があるが、普通にはくさいと呼ばれるのは結球はくさいである。

はくさいは、東南アジアまたは近東方面に原生し、中国の北部、東北地方において結球はくさいとして発達した。その後、中国南部、台湾、朝鮮に普及し、日本には明治の初めに導入された。栽培が一般化したのは大正の初めころからである。

昭和33年の農林省統計表によると、わが国の結球はくさいの作付面積は35,100ヘクタール(1ヘクタール=1町として)推定実収高は659,400トンである。本県の実収高は87,300トンで全国1、第2位の福島県が42,700トン、愛知32,400トン、群馬28,600トンとなっている。

本県では、結城郡の八千代村が6,249トンで最も多く、次いで猿島郡の谷町村、筑波郡の谷田部町、豊里町あたりが、はくさいの栽培が盛んである。